

1 1 ジョルジョーネの画面合成技法

真鍋友範

2019

ジョルジョーネは、盛期イタリア・ルネサンス期の先駆的《画面合成技法》の開拓者だった。その《画面合成技法》は、現代人がコマーシャル映像で普段目にする当たり前の《画面合成》映像を驚くべきことに、約500年前に絵画で実践していたのだ。

~~~~~

さて、まずはジョルジョーネ作とされる4枚の絵画をじっくり比較していただきたい。

4作品の共通点は何なのか。

《人生の三世代》と呼ばれている作品（図版1）では、左端の赤い聖衣の男が《明暗法》で描かれ、他の二人、つまりイエスと弟子の2名が、《スフマート技法と明暗法を混在させた技法》で描かれている。つまり、肖像画の部分と物語画の部分がうまく画面合成されているのだ。なお、《人生の三世代》の題名は誤っている。あえて題名を授けるなら、《イエスが布教する如く、我（レオ10世）も布教せん》だ。

《嵐》（図版2）は当時の遠近法の法則にあえて従わないことで、男と母子を描き分けたことにより、結果的に両者が遠く離れた空間に存在する事を強調する【画面合成表現】であることを示している。  
【ヴィーナスの身長は男の約1.2倍なのだ。】

《田園の合奏》（図版3）は、【地上界と天上界の風景を合成した画面】になっている。決して一連する田園の風景が描かれているのではない。特に亡くなった人物を暗い顔で表現する部分は《嵐》との共通点でもある。また、弦楽器を奏でている牧童のいる遠景の描

写が前面の天上界と区別するかのよう、断層のように表現されている。

《羊飼いの礼拝》(図版4)では【聖書物語と実際目にする地上の風景が合成された画面】として表現されている。あたかも二つの異なった場面であることを強調するかのよう、背景の風景にいる子ども達は極端に小さく描かれ、前景との隔たりが意図的に強調されている。つまり、前景の物語部分がより強調されるような描き方なのだ。

つまり、多くの観衆は、ジョルジョーネの描いた4作品を、ありのままに展開する目に映るスナップ写真のような一連の情景と判断する為に、その内容判断を誤ってしまうのだ。

言い換えるなら、ジョルジョーネは、絵画で描くことの出来る世界を、スナップ写真のような単純な視覚世界ではなく、極めて高度な画面合成の描写技法を使った深い精神世界の内容を描く手段、として捉えているのだ。

描かれた時代が盛期イタリア・ルネサンス期である事実を踏まえると、ジョルジョーネの目指した表現は、当時においては極めて革新的な表現スタイルであったともいえる。

考え方によってはレオナルド・ダ・ヴィンチも越えた超近代的表現と判定できる表現なのだ。

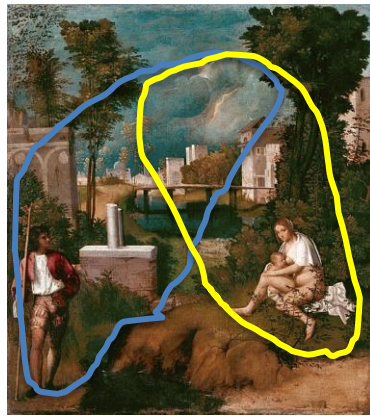
絵画表現の技巧性においては、ジョルジョーネはレオナルドを超えた天才かもしれない。



図版 1

《人生の三世代》 1510頃

\* 肖像画と物語画の合成画面



図版 2

《嵐》 1506-08

\* 男の空間と女の空間の合成画面



図版 3

《田園の合奏》 1509頃

\* 天上界と地上界の合成画面



図版 4

《羊飼いの礼拝》 1504

\* 聖書場面と現実の風景の合成画面-前景との隔離を感じさせる極端に小さく描かれた子どもたちの描写に注目（赤い円の中）

レオナルド・ダ・ヴィンチは優れた絵画を残しているが、レオナルドが科学的見地からの人物再現や、人物内面の身体動作による表現、あるいは視線誘導と絵画構図の関連性に関心が高かった事に比べ、ジョルジョーネは、【絵画空間の合成】への関心が高かった。

特にジョルジョーネの亡くなった1510年以前の数年間の作品には、その問題意識の存在を証明できる作品が確実に存在しているのだ。